

『八重葎』注釈（下）

田村俊介

今回掲載するのは、全体をおよそ二十八の段落に分けた、その終盤の七段落、今井源衛氏『やへむぐら』（古典文庫、一九六一年）で言えば、55頁から165頁に亙って本文が掲載されている、その132頁三行目から165頁最終行までである。今井氏の古典文庫本には、注や引き歌、部分訳が掲載されているが、今回の範囲で言えば特に、注三三二、注三五五、注三五九、注三八二を訂正する。底本の複製に基づき、或いは、別の観点から、今井氏の釈文で訂正した箇所は、今回の範囲では、134頁一行目、136頁六行目、152頁四行目、155頁の五行目から八行目まで、である。底本の複製一部の購入、又、掲載を許可して下さった、静嘉堂文庫御当局には、心よりお礼申し上げます。

凡例

◎本稿は、静嘉堂文庫本『八重葎』（『やへむぐら』）の釈文を掲載し、これに必要な注釈を加えたものである。

◎底本の様態、『八重葎』の他の写本との本文比較は、他書に譲る。既に出版された学術書にも記載されているところであり、又、今後出版される学術書にも詳述される予定であるとのことだからである。このため、次のような処置を取った。

ア. 底本に誤写があると思しき箇所は、語釈に記した。

イ. 底本には、引歌引詩をあらわす山型の印があるが、これは、本拙稿では、省略に従う。

ウ. 底本に見せ消子・補入がある箇所については、見せ消子後、補入後の本文に基づき積文を作った。例えば、一〇丁表5行目に「御有さまかな」とあるが、これは、「御有様かは」と積文を作り、消された「な」の字は記さなかった。静嘉堂文庫本の様態の厳密な再現は、古典文庫本を含む他書に譲るつもりだからである。

エ. 底本の仮名遣いは歴史的仮名遣いに直し、適宜、ひらがなを漢字に、漢字をひらがなに直した。なお、このような処置に準じて、例えば、「かう」を「こう」に直した箇所もある、具体的には「九」に、「内裏うちには弘徽殿こうきでんさぶらひ給ふに」と記した箇所は、底本では「うち」に「ハかうきてん……」（一七丁裏8行目）である。

オ. 会話文には、「」を付けた。その会話文の中の会話文には、『』を付けることがある。更にその『』で包まれた会話文の中の会話文（今回の範囲では無し）には、∧、∨を付ける予定である。そして、話者を（ ）で括って示すことがある。
カ. 心内文に就いても、前項に準ずる処置を施すことがある。

◎諸作品の引用には、主として、次の叢書を用いた。
者（編者）、出版社、出版年等も書き添えることにする。

◎和歌集の引用には、次のような基本方針を採る。

イ. 八代集のうち、新全集が収録している作品（『古今和歌集』、『新古今和歌集』）については、新全集を用いた。

ロ. 八代集のうち、イで記した二つの歌集を除く六つの歌集（『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』）については、新大系を用いた。

ハ. それ以外の歌集については、角川書店発行『新編国歌大観』（一九八三年）を用い、その叢書名も書き添えた。

◎散文作品の引用には、次のような基本方針を採る。

イ. 『徒然草』の引用は③の新大系に拠った。正徹本を底本にしているからである。

ロ. 『徒然草』を除くほとんどの作品については、②の新全集を用いた。同叢書は、キッコーカーッコ（ ）で段落番号を示しているの、それによって、引用箇所直接たる便を図った。『源氏物語』からの引用の場合、巻名とそのキッコーカーッコ内の段落番号のみを示し、

『源氏物語』という) 作品名は省略した。

八、新全集以外の叢書(研究書)から引用する場合、その叢書名(研究書名)を正式名称、若しくは、略称で示した。

研究書を引用する際には、著者(编者)、出版社、出版年等を書き添えることにした。但し、次の三著については、二重三角カッ
コで包んで、著者の苗字のみ、若しくは、著者の苗字と論文名や書名のみ記させていたたく予定である。

○今井源衛氏『やへむぐら』(古典文庫、一九六一年)の解題や注及び本文表記に添えられた注記 ↓ 《今井氏》

○辛島正雄氏『八重葎』物語覚書——中世物語における『狭衣物語』受容の問題と『八重葎』の位置——(『文学研究』第八二号、一九八五年)。二〇〇一年に、『八重葎』覚書——『狭衣物語』顕彰の物語として——という題で、『中世王朝物語史論(下)』に採録。

本拙稿で引用する際には、再録に拠る ↓ 《辛島氏『八重葎』覚書》

○久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年) ↓ 《久保田氏・馬場氏『歌ことば歌枕大辞典』》

◎和歌集や散文作品を引用する場合、右の引用テキストに直接当たって引用した。従って、文章の表記や歌番号等に就いて今井氏の引用の仕方と違うこともある。しかし、古典文庫本に同じ作品の同じ箇所からの引用がある場合には、《今井氏》などと記すことにした。

◎本作品自身の他の段落に参考となる一節がある場合、キッコーカッコ()内の段落番号と共に引用することにした。本誌前号、前々号掲載の範囲でも童謡である。

〔二二〕 中納言の使い、八重葎の宿へ〕

まことや、かのありし葎の宿りへは、発ち給へりし又の日、御文ありけり。門鎖して人氣も見えねば、(中納言の使者)「物語でやし給ひし。さるにても、一人二人は止め給はぬやうはあらじを。あやしくもありけるかな」とこなたかなた見巡らせど、影だに見えねば、この隣に寄り来て、しかじかと尋ねければ、あるじの女、出で来て、まづうち泣きて、言ひやる方なし。いとど心得ず思ふに、聞こゆるやう、(隣のあるじの女)「このあなたにもやし給ふ姫君の御後見は、如月の頃ほひより、大式の北の方に成りて、近き程に筑紫へものせむと出で発ち給ふを、いと悲しうし給ひて、泣き沈みてものし給ふと聞き給へしが、にはかに絶え入らせ給ひしかば、(人々)『あまりいみじとものを

思したるにこそ。さりとも、いたづらには成らせ給はじ』と思ひ扱ひ給ひけるに、かばかりに限りける御命にや、げにそのままにて絶え果て給ひぬれば、誰も誰も言はむ方なく思ひ嘆き給へし。昔物語にこそかかる事は聞き伝ふことに侍るを、目に近くも見給へしかな」とて、まがまがしううち泣きぬ。あるべき事とも思ひかけねど、(中納言の使者)「なげのあはれを作り出でむに、その人に近きゆかりにてだにかうまで涙の落ちぬべきにもあらぬを、ましてよそに聞くらむ辺りを、かばかり見ゆるは、浮きたる事にはあらじ」と思ひたどられて、(中納言の使者)「いとこそあやしきわざには侍れ。いかでかくなんとは告げ給はざりし。御般はいかがし給ひてし」と、問ふ。(隣のあるじの女)「御悩みの辺りへ聞こえさせても、今は甲斐無きものから、かつはまことしう思すべき御仲にもあらず、数ならざらむ身の何かはとて、やがてその日忍びて、煙になし奉り給ふ。御しるしさへここに残し給はぬは、筑紫にと思ひ給へるなるべし。かの今の殿には、明日明後日の程に門出し給ふべきと聞こえ給へば、かかる穢らひ忌み給ひぬべき折なれば、あなたさまにも深う隠し聞こえ給ひし」などつきつきしく聞こえなす。(中納言の使者)「さらば、かくこそ申さめ」とて帰りぬ。

語釈

○まことや 現代語の「追伸」などに当たり、書簡等に用いられていたが、『源氏物語』では、書簡の中だけではなく、地の文でも用いられるようになった。その、地の文の「まことや」は話題を転換する際に使われる発語で、時間を遡って語る場合もある。例えば、「若菜下」では、それ以前では、光源氏が紫上の看病で手一杯の様子が語られていたが、「まことや」で始まる段落からは、時間を遡って、柏木が女三宮に恋着する様子が語られることになる。小林美和子氏「複線型叙述の物語構造に於る効果」(『国語と国文学』昭和五十年十二月号)、田中仁氏「まことや」——光源氏と語り手と——(『国語国文』昭和五十六年三月号)など。

○いと悲しうし給ひて、泣き沈みてものし給ふと聞き給へしが、にはかに絶え入らせ給ひしかば、八重葎の姫君が叔母との別れがつかけて、心痛のあまり危篤状態(に陥り、その後、死んだ)と言っているが、これは、隣のあるじの女のうそである。

○「……げにそのままにて絶え果て給ひぬれば、……。昔物語にこそかかる事は聞き伝ふことに侍るを、目に近くも見給へしかな 今井氏は、夕顔頓死の場面を模倣した、と指摘する。「この枕上(まくらがみ)に夢に見えつる容貌(かたち)したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語にこそかかることは聞け、といとめづらかにむくつけけれど、……」(『夕顔』(一一二))。

約二〇音節の語句の一致があるが、夕顔巻の「かかること」は、夢に見えた女が夕顔の近くに居ることを指しているのに対し、本作品の「かかる事」は必ずしもそれと似た内容ではなく、八重律の姫君の（叔母との別れの悲しみのための）死を指すと思われる。

しかし、確かに、参考になる先行記事ではある。

○「御悩みの辺りへ聞こえさせても、…… 中納言の使者の詞のうち「いかでかくなんとは告げ給はざりし」という質問への答え。「御悩み」は中納言の母の病気を指す。

〔三三〕 中納言の追悼と後悔

参りて、有様詳しく聞こえさせれば、（中納言）「たとへざる事あらむにつけても、使ひの来たらむに、『かく聞こえよ』と聞こえ置く文などは残すべきを」と宣ふ。（使者）「それなん尋ね侍りにしに、（隣の主）『かの御後見は少しなほなほしき人にて、おのれを慕ひてかく成り給ひぬるを、へいとほし、悲し』とも深く思ひたらで、行く道にのみ心をやりて、あはただしく急ぎ立ち給ひしかば、さやうの方は、よも思ひ寄り給はじ』とこそ聞こえ侍りつれ」と申すに、まことにやと思し寄るも、夢の心地ぞする。（中納言）「大弑と聞けば、その子のだう大輔などや率て隠しつらむ。懸想し寄らむに、難かるべき住居かは。身づからの本性、はた、やはらかなつかしうて、強き所はなかりきかし。いかに思ひ懸けられて、はふれ行きけむ。（八重律の姫君）『あはれ』と思ひしかば、さりとも、我を忘るるにはあらぬものから、心のほかにこそ率て行かれつらめ』と、まだ疑はしき方は添ひぬれど、かうさださと聞き給ふには、あだなる命を頼み、疑ひ給ふべきにもあらねば、又、うちかへし亡き道に思し弱るに、いみじう悲し。（中納言）「もとより、まことしう思ふべき人にはあらぬものから、なほ、心よりほかにかくてあらむ程の慰めには、ますことなくこそあはれなりしか。ここに忍びて渡してましを。さりとて、その程に限りたらむ命のはかなさは、必ずそれに拠るべきならねど、目の前の別れは、悲しさの一筋こそあらめ、かくおぼつかなき嘆きまでは添へざらましを」と、取り集め思し続けるに、らうたかりしつらつき、なつかしかりしけはひは、ただうち向かひたる心地し給ふに、やがて御涙のみ催すつまにてありける。御心地の少しよろしく思さるる頃なれば、例の我が御方にてながめ給ふに、空に知られぬ雪と降り行く庭のけしきにも、（中納言）「いづれか先に」とまづ思さるるに、（中納言）「八重律の姫君」『なほうつるはむ』と言ひ来し日の、見し先々よりもあはれに心とどめしは、さはそれが限りなりけり。なほたち返り聞こえてだに、けしきも見るべかりきを」とそれさへ返す返すくやし。

(中納言)

我もさこそ惜しみしものを桜花

などもろともに散らず成りけむ

日は入り果てぬれど、光はなほ残れるに、薄黄ばみたる雲の柵引きたる空は、あはれなることに言ひ置きしを、もの思ふごとにながめられ給ふ御心には、ましておほかたならざらむや。

(中納言)

今はただむなしき空を仰ぎつつ

柵引く雲をかたみとや見む

何につけても、紛らはし難きに、有明の月もやうやう高くさし出でたり。

かばかりは慰めかねじ更級や

をばすて山の月にはありとも

思へば、いとよしかし。入り難き道のしるべには、なほこの嘆きの繁きこそ、たづきにはならぬ」と、いとどこの世をかりそめに思し成らるるには、なかなか嬉しき契りなりしを、あひ見し初めつ方、ほだしにやなどおぼえて、馴れ行くさへいとひて途絶えがちなりけむよと、又、打ち返しくやしきは、なほ口惜しき心の程と身づから思ひ知られ給ひて、御行ひをいとまめやかにし給ふ。かの人の七日七日の法事も、横川のなにがしの僧都は、日頃の御得意なりければ、宣はせつけてたふとくせさせ給ふ。

語釈

○たとへさる事あらむにつけても、……『かく聞こえよ』と聞こえ置く文などは残すべきを 中納言は、叔母の置手紙がないことを不審に思っている。そのため、この時点では、姫君の死去もすてうそだと心のどこかで思っている。

○それなん尋ね侍りしに 今井氏の翻字では「それなんたづぬ侍りしに」であるが(一三四頁11行目)、原本では「それなんたつね侍りしに」(四九丁裏5行目)であり、「ぬ」の字は今井氏の誤植であろう。

○行く道にのみ心をやりて　上機嫌で、ということだが、その「心をやりて」いる人に対して、「自分（たち）だけいい気になって」というニュアンスで、作者や話者が皮肉な視線を浴びせている場合も少なくない。

尚、本作品全体に関わる典拠の一つとして、『源氏物語』の末摘花物語があげられているが、末摘花の叔母に就いても「されど、行く道に心をやりていと心地よげなり」（三三九頁）という記述がある。

○さやうの方は、よも思ひ寄り給はじ　この話者（八重葎の宿の下人）は、置手紙が書かれなかつた理由として、叔母があまりにも急いで出発したため、ということにしている。本当は、あくまで、叔母を難波まで見送って、すぐ帰ってくる予定だったためである。

○あだなる命を頼み、疑ひ給ふべきにもあらねば　この時点では、さすがに死亡をむげに否定できなくなつた。

○ここに忍びて渡してましを。：：目の前の別れは、：：おぼつかなき嘆きまでは添へざらましを　現実を受け入れたくない中納言が、反実仮想を繰り返している。

○かくおぼつかなき嘆き　今井氏の翻字では、「かつおぼつかなき嘆き」である（136頁六行目）が、今井氏が「つ」と読んだ字を私が「く」と読む理由については、「二八」語釈の「かく憂き身ながらも、」の項参照。

○御心地の少しよろしく思さるる頃なれば、例の我が御方にてながめ給ふに、母の体調が良いときには、中納言は、看病をやめて、自分の部屋に戻る。

○空に知られぬ雪と降り行く　「さくらちる木の下風は寒からで空のしられぬ雪ぞ降りぬる」（『拾遺和歌集』・一・春）《今井氏》。「空に知られぬ雪」はこの本歌の第四句く第五句。「と」は「のように」の意の助詞で、和歌で使われる。

○（中納言）「いづれか先に」とまづ思さるるに、　「桜を植ゑてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植ゑける人身まかりければ、その花を見てよめる　紀茂行きのもちゆき　花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきに恋ひむとか見し」（『古今和歌集』巻一六（哀傷）・八五一）。本歌の第四句は「いづれを先に」、本作品では「いづれか先に」であるが、この違いは内容の理解を左右するものではないだろう。

○……薄黄ばみたる雲の棚引きたる空は、あはれなることに言ひ置きしを、　『枕草子』「日は」の段に「日は　入日いりひ。入り果てぬる山の端はに、光なほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄うすきばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。」（新全集『枕草子』（底本は三巻本系）第

二三四段)《今井氏》。能因本系では、「日は 入り果てぬる山ぎはに、光のなほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり」(引用は、全集に拠った。第二二七段)。

○もの思ふことにながめられ給ふ御心には、「大空は恋しき人の形見かは物思ふことにながめられし」(『古今和歌集』・卷十四(恋歌四)・

七四三)《妹尾氏》『八重律』引歌表現覚書(掲出誌等は凡例参照)。

○今はただむなしき空を…… 雲が故人を偲ばせる、という発想は、夕顔巻で光源氏が詠んだ夕顔追悼歌にも見られる。「見し人の煙を

雲とながむれば夕の空もむつまじきかな」(「夕顔」(一七))

○有明の月もやうやう高くさし出でたり 日の入りから「有明の月」が出るまで、かなりの長時間、中納言は物思いにふけていたことになる。

○かばかりは慰めかねじ…… 今井氏は、『大和物語』第百五十六段の詠歌を出典として指摘する。信濃国、更級の男が「親のごとくに、若くよりそひて」いた伯母を山に捨てて家に帰り、「月もいとかがりなくあかくいでたるをながめて、夜ひと夜、いも寝られず、悲しうおぼえければ、」次のような和歌を詠んだ、「わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山に照る月を見て」。「それよりのちなむ、をばすて山といひける。なぐさめがたしとは、これがよしになむありける」。

この章段を踏まえ、しかし、「をばすて山に照る月」以上に、慰められないのが、今、目の前にある有明の月だ、と言っている。

〔二四〕中納言、中務宮へ姫君との経緯を告白

御心にも、ただ今日今日と思ひ立ち給へど、この御心地を見奉り捨てむことはいかにも難く、あはれにかたじけなき方はまさり給へば、行方なく聞かれ奉らむことはあるまじく、かく物思ふけしきも御覧じ知らば、苦しきかたてにいとほしく思し乱れむと、それさへ漏らし給はねど、かくなどさぶらふ人々忍び聞こえてければ、いみじう悲しと思す。(母君)「すべて何事も心に入らむことはあるまじき頃しも、そのけしきさへ見せず持て消ちて、いつとなき心地のむつかしさを、あはれにものし給ふこと」と愛しう思ひ聞こえ給ふこと世の常ならず。「かく見させ給ふ間に、右の大臣へ渡り給はなん、よろしかるべき。嬉しと御覧ぜむに、さはやぎ給ふこともあらむ」など、中宮、中務宮など聞こえさせ給ふ。上もさ思したれど、かかる程にはあるまじきこととうるさがり給ふに、この人知れぬ御嘆きさへうち添ひたれば、いとはど

いかにといとほしくて、この頃は上さへもろともに聞き入れ給はぬを、世の中にはひがひがしきやうに聞こゆる人もあるべし。なほ御心地のたのもしげなくおぼえ給ふままに、御髪おろし給ふ。さるは故殿の隠れ給ひし程にと申し立ちしかど、(人々)「変はらぬ御様に、大臣へ御渡りの程をも扱ひ御覽せられむはよろしかるべし」など、方々より聞こえ給へば、今まで過ぐし給うてけり。四十に一つ、二つあまり給へば、まだいと若うをかしき御様なれば、あるもあるも悲しと惜しみ聞こゆ。されど、忌むことしのしるしにや、こよなくさはやぎ給ひて、祭りの頃は常のおましにも出で給へば、中納言殿をはじめ、誰も誰も嬉しう思ひ聞こえ給ふ。

今少し名残残りたれど、(中納言)「かばかりに見え給へば、心もとなき程にもあらず」とて、君は内裏へ参り給ふ返さに、中務宮へ渡り給へば、宮は上の御方にて、若君をもて遊びておはします程なりけり。「かくなん」と御消息聞こゆれば、「こなたに」とて、母屋の御簾下ろして入れ奉り給ふ。(中務宮)「ただ今などは思ひかけざりしに、珍しき御渡りかな」と御直衣引きつくるひ、御茵参り添へて、御対面あり。(中務宮)「いかにおはすべきにかと、うちうちにも嘆き給へしに、かく平らかにものし給ふこと、御心にも劣らず思し召す」など聞こえ給ふ。

(中納言)「例のあつしきにも侍らず、いと苦しげに見え侍りしかば、ただ今かうさはやぎ給ふべくも思う給へざりしに、あやしきまで御心に入れ聞こえさせ給ふ御とぶらひのおろかならぬ力にやと喜び思う給ふる」など、かしこまり聞こえ給ふに、若君、御簾を引き着て、いとうつくしき御顔にてさし出で給へるを、中納言の君、扇にて招き給へば、すがすがとあふなく走りおはして、膝につい居させ給ふ。いとらうたくて、(中納言)「久しく見奉らざりし程に、こよなくも大人びさせ給へるものかな。何がしが子にならせ給へらむや。さらばいとど愛しう思ひ奉らむ」と聞こえ給へば、うなづき給ふ。(中納言)「宮の御前とはいづれか思す」と宣へば、宮の方を見やりて、物しげにためらひ居給ふを、(中納言)「なほなほ」と聞こえ給へば、耳にうつくしき御口を当てて、(若君)「おのれを思ふぞ。宮はむつかりて憎し」ときさめかせ給ふ様の、いはけなくをかしきに、宮、「何、何」とて近く寄せ給へば、いとど首にかい付き給ひて、「率て立ちね」と身を揉ませ給ふに、いみじううたくをかしくて、抱き奉りて、例の客人居の方におはしたれば、宮も渡り給ひて、御物語こまやかに聞こえおはすに、暮れ果てぬ。御前の橘の、いとなつかしううちかをを避きて、ほととぎすのいつち行くらむ、忙しげに鳴き捨てて過ぐるも、この頃は常よりあはれに耳留まりて、ふと、

ほととぎす恋ふると告げよ亡き人に

死出の田長と名には立たずや

と思ふこととて言はれ給ふを、(中納言)「あやし。所こそ」と紛らはし給へど、宮はいととう聞かせ給ひて、

立ち返り鳴きて知らせよほととぎす

いかなる人の別れなるらむ

かばかり思ひ給へらむことを、つれなく忍び給ふは、なほ心の隈多く隔て給へり」と恨み給ふ御様のをかしく、あながちに隠すべきにもあらず、心一つに苦しきを聞こえてだに、慰まほしければ、え包み給はで、(中納言)「過ぎし秋のもみちの返さに、葎の宿り見入りて侍りに、らうたげなりし人の閉じられたらむは、いかが思ひのほかにをかしうあはれにおぼえ侍らざらむ。くねくねしうさかしらだつものも見えず、あはれに心安くまことになにがしがよすがとたのむべきに故づきたる人に侍りしかば、時々まかり通ひて、世の中のうればしきも、かたみに聞こえかはすにつきなからず、かれ、はた、まして背くべくも見え侍らざりしかば、いとどうち捨て難くて過ぐし給へしに、この弥生の末つ方に、にはかに失せにきと聞きつけ給へしかど、目の前のいみじさを捨ててまかるべきにも侍らざりし程に、その程のことはおぼつかなくて過ぐし給へしかど、さすがに忘れ難くて、かく咎め聞こえさせ給ふまでに御覽せられしこと」と語り聞こえ給ふに、宮、「いとほかなくあはれなりけることかな。かう月頃ありしに、そのけしきも見せ給はざりしは、こよなき聖心かな」と聞こえ給ふ。返り給ふとて、かの葎の門おはし過ぐるに、いとど荒れぬる心地するに、月のみ昔ながらに射し入るもあはれ少なからず。木末ばかりぞ隠るるまで見送りぬべう見渡され給ふに、例の涙のほろほろと御袖にかかりければ、

八重葎蓬がもとほよそに見て

行き過ぐるにも袖ぞ露けき

おはしまし着きても、ここには、慣らひ給はねど、御傍ら寂しき心地して寝られ給はねば、例の御行ひに紛らはし給ひて、明け方近う大殿籠もる。まれまれ、夢に見給へど、ただありし世のこと、その折の心地のみなれば、甲斐無く嘆き暮らして、夏も過ぎ、秋にも成りぬ。

語釈

○かかる程にはあるまじきこととうるさがり給ふに、母の病気のあいだは、右大臣の娘との縁談など進めるわけには行かない、と、中

納言は乗り気にならなつた。

○この人知れぬ御嘆き 八重葎の姫君の死を嘆くこと。

○世の中にはひがひがしきやうに聞こゆる人もあるべし。 権門の姫君との縁談に消極的な態度を取る男性やその母が、「ひがひがし」と評されている。女二宮との縁組にあまりにも乗り気でない態度を取り過ぎると「ひがひがし」と思われる、という薫の心内文もある(「宿木」〔五〕)。

木」〔五〕)。

○うちうちにも嘆き給へしに、「嘆き給へし」の「給へ」は下二段活用の補助動詞「給ふ」の連用形。この動詞は、『源氏物語』の場合、ほとんどが「思ふ」に続くが、他に「見る」「聞く」の続く例も散見する。「嘆く」を受ける用例は見出せないが、「嘆く」も「思ふ」の類義語なので、ひとまず、作者の誤用や書写者の誤写ではないものとしておく。

○ただ今かうさはやぎ給ふべくも思う給へざりしに、 底本は「たゝ今かうさハやぎ給ふへくも思ふ給へらざりしに」(五四丁表2く3行目)。「給へ」を下二段活用の「給ふ」の未然形と見なし、「ら」を削除した。もし「さはやぎ給ふ」ことがなさそうだと判断したのが母自身とすれば、この「給へ」は四段活用の「給ふ」ということになるが、文脈上、やはり中納言が主語だと考えざるを得ない。

○……喜び思う給ふる 底本は、「……よろこひ思ふ給へる」である(五四丁表5行目)が、今井氏の推定(四三頁1く3行目)に従い、「……給ふる」の誤写だと判断する。

○御物語こまやかに聞こえおはすに、 底本では、「御物かたりこまやかきこえおはすに」(五四丁裏10行目)。今井氏の推定に従い、「こまやか」の下に「に」を補つた。

○慰まほしければ 底本は「なくさまほしけれハ」(五五丁裏3く4行目)であるが、「なくさままほしければ」の誤写と判断した。

○いとどうち捨て難くて過ぐし給へしに……にはかに失せにきと聞きつけ給へど……おぼつかなくて過ぐし給へど 下二段活用の補助動詞「給ふ」が三度使われている。

この動詞は、『源氏物語』の場合、ほとんどの用例が「思ふ」に続くが、他に「見る」「聞く」に続く例も散見する。「聞きつけ給へど」の用例は、「聞く」の複合動詞に続いているのだから、明らかに正格である。

他の二例は、『源氏物語』では「過ぐす」を受ける用例が見出せないもので、一見、破格だが、それぞれ、「いとどうち捨て難」いと思いがら過ごしていた、「おぼつかなく」思いながら過ごした、の意であつて、「思ふ」に続くといふこの補助動詞の性格を持ち合っているの、ひとまず、作者の誤用や書写者の誤写ではないものとしておく。

○かく咎め聞こえさせ給ふまでに 今井氏は、注三三二で、「こうしてお咎めをお受けするほどの様子をお目にかけてしまつたことです。」と訳しているが、「咎(む)」は、少なくとも『源氏物語』など平安文学の場合は、見て気が付く、ぐらゐの意であつて、現代語の「お咎めを(する)」ではないだろう。

○こよなき聖心かな 「聖」とは、女性に全く情欲を抱かない、という意味で使われることがある。「(八の宮は)心ばかりは聖になりはてたまひて、故君(亡くなつた北の方)の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心ばへ(後妻をもらう意志)など戯れにても思し出でたまはざりけり」(橋姫) (二二)。ここでは、女を失つた悲しみを面に表さない、という意味であらう。

二二五 中納言、母の湯治のため、有馬の湯へ

上の御心地なほ残りありて、悩ましげに見え給へり。かかるには有馬の湯浴み給ふなんよろしう侍ると聞こゆる人ありければ、公に御暇聞こえ給ひて、上具し奉りて、八月十日の程に思したちけり。御送りに人々あまたものし給へど、ことさらことごとしかるまじく、(中納言)「忍びて」と宣ひて、山崎より皆返し給ふ。秋の野もやうやうなまめかしくて、山々の錦もかたへ色付きつつをかしう見ゆるは、さは言へど、絵にも劣るまじげなり。朝夕見むだになほ、時々に移り変はるけぢめはこよなかるべきをまして珍しう見給ふには、をかしのみ。賤の男の田を刈りて、稲担ひ持てる顔のからきもあはれに御覧す。「これなん、猪名の笹原」など申すを聞き給ひても、中納言殿は例の心に任せぬ御身に引き掛け給ひて、かかる所にだに笹の庵も引き結ばまほしう思すに、いとど、

かくてのみいつまでか世にありま山

猪名の笹原否と思へど

おはしまし着きて、湯に降り立ち給ふ。七日にて試みさせ給ふに、こよなうよろしうおぼえ給へば、「今一回り」と思し宣ふ。近き辺り、遠き国々より、年老いたる親、兄人やうの者、又若やかなれど悩ましと見ゆるなどをとかくつくるひかき抱きて、ののしり騒ぐ様いとあはれに、(中

納言)「何ばかりの身にもあらぬを、絶えずもて扱ふらむ。思へば命こそ求め難きものにはあれ」とまづ近き夢のさまし難きを思ひ出で給ふ。かかる所にては、いとど類ひなげに見え給ふを、見慣れ奉る人々さへをかしう見奉れば、まして辺りの山がつなどは恐ろしきまで思へり。京よりもこなたかなたの御とぶらひ、いとしげう聞こえ給へば、もの寂しき御旅居の心地もせず。その辺りの者にも程々につけて、何やかや賜はせければ、ありがたく又なきことにめでののしりけり。

語釈

○八月十日の程に 「野の盛りは、八月中の十日、山の盛りは、九月上の十日のほどになむ」(『うつほ物語』「吹上下」(二))。「八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもをかしきころなるに」(『夕霧』(二))。

○秋の野もやうやうなまめかしくて、 今井氏の翻字では「秋野のもやう／＼なまめかしくて」(一四七頁1、2行目)、注では、「秋野のも」を掲出し「秋の野も」の誤りであろう」としている。底本の五七丁表7行目では、確かに、「秋野のも……」である。今井氏の説に従いたい。

○「これなん、猪名の笹原」など申すを聞き給ひても 「猪名」は、都から有馬の湯へ行く際には手前にあり、「有馬」と共に使われることが多い歌枕。《久保田氏・馬場氏『歌ことば歌枕大辞典』(出版社等は凡例参照)の「有馬山」の項目を参照した。「有馬山」執筆は、徳原茂美氏。例えば、「かれ／＼になる男の、おぼつかなくなぐいひたるによめる 大式三位 有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする」(『後拾遺和歌集』・卷十二(恋二)・七〇九)など。《今井氏》

○かくてのみいつまでか世に…… 「ありま山」には、「いつまでか世に」あり」が掛けられている。「有馬の湯に忍びて御幸侍ける御供に侍けるに、湯の明神をば三輪の明神となむ申侍なる、ものに書き付けて侍ける 按察使資賢 めづらしく御幸を三輪の神ならばしるし有馬の出湯なるべし」(『千載和歌集』・卷二〇(神祇)・一一二六七)。

〔二六〕 中納言、難波へ

かかるついでならでものし給ふべきならねば、返さには、難波へ渡り給ひて、それより舟にて住吉へ詣でさせ奉り給ふ。ここかしこと珍しき御逍遥にいよいよ御心地もさはやぎ果て給へば、(中納言)「この御悩みのなからましかば、いかで御覧すべき」とをかしう思す。さぶ

らふ人々は、まして千代をも経ぬべく、若き人はすずろに帰りま憂く思ふもをかしかりけり。君は夕暮れの程に、さるべき限り、一人二人御供にて、その辺り見給ふとて、(中納言)「いづら、人々の言ふ御津の寺は。この程にや」と尋ねおはすに、村雨のほろほろとかかりければ、「なには隠れぬ」と貫之がかこちけむ古事、思し出でられて、

名にし負はば濡るとも行かむ難波瀧

田蓑の島の雨の夕暮れ

寺の様はいとあはれに、年古りたる軒の板間に、忍ぶの露繁きを、小法師ばらのうち払ひ出で入るも、はしたなき程にはあらず見ゆるに、例の、古事まづ思し出でて、「蒼苔路滑らかにして、僧、寺に帰る」とうち誦じて、こなたかなたたたみありき給ふ。仏の御飾りなどは、いとみやびかなれど、幡の様は、さすがに年古りし程しるくて、いとしみ深う煤けたるも、なかなか今様の今めかしさよりあはれにをかしう思されて、待たれける鐘のつくづくとながめ居給ふに、山吹色の幡の、これは又はなやかなるを、昔の人に遣はし給ふ衣の色思し出でて、「もし、それにやあらむ、亡き数に聞けば」と類ひ多かるものなれど、忘れず思し渡る筋なれば、うちつけになつかしき心地し給ひて、立ち寄りて見給へば、(八重律の姫君)「花色衣身を去らねば」とあるを、かの人の手と見なし給ふに、あるかなきかに墨枯れして書きたれど、まがふべくも見えぬに、まづほろほろとこぼし給ふ。この歌の本のゆかしければ、又、「これにや」と仏の御左の肩にあるをも尋ね給へど、鼠の喰ひける跡のみありて、文字は見えず。(中納言)「この喰ひける下にやありつらむ。かかる物まで損なひけむ、さがなきものかな」と、憎く思さるるも、この筆のすさびのあながちに見まほしき御心の行く方なりけり。法師の書ける願文にも、「大式の御女の菩提」などあり。かからぬ程だにあやしう思しぬべきを、思ひ懸けぬ千歳の形見に、なほ来し方のたしかに知らまほしければ、あきのぶを召して、(中納言)「このあるじの僧はここにもすや。この寺を建てそめつらむ昔語りも、尋ねまほしきに、率て参れ」と宣ふ。かしこまりて、しばしありて、あやしき法師を率て参る。かかる者さへ仏の御跡をまなぶは、うらやましうて、弟子にもならまほしう見給ふ。(あやしき法師)「あるじはなすべきことありて、この頃、京にものし侍る」と申す。古きこと尋ね給ふべき様もしたらねば、ただゆかしきことの筋のみ問ひ給ふ。(中納言)「この山吹の幡、いづくよりもしつるぞ。今めかしく見ゆれば、近き程しるくて、あはれに聞かまほしき」と宣ふ。(あやしき法師)「これなん、いにし弥生の未つ方に、筑紫へ下り給ふ大式とやらむ御女の、とみに隠れ給ふとて、この寺に率て詣でて収め給ひし、その御

装束に侍る。御しるしは、あの透垣の内にもやし給ふ。御乳母にや侍りけむ、若き女のいといたう悲しみ給ひしが、頭おろして、やがて近く行ひ給ふ。御忌日ならでもしばしば詣で来て、今にいみじう恋ひ泣き給ふめる。なほ詳しく聞こし召すべきことに侍らば、かの尼君を率て奉りてむ」と申す。かたくなしう語りなせど、まがふべくもあらねば、いと悲しうわき返る心地し給へど、強ひてつれなくもてなし給ひて、さるべき物など賜はせて返し給ふ。人々の思ふらむも憚られ給へど、いづれもむつまじき限りなれば、さのみもえつつみ給はで、法師の教へし方をそこはかと尋ねいますに、いと草高う露繁く、かかる御思ひを知り顔に、虫もほかよりは鳴き添へたるに、御袖のいとまなくて、道もたどたどしきを、御指貫少し引き上げて、強ひて分け入りて、それと見つけ給ふ。御心迷ひ、言へばさらなり。「かくまで弱くあるべきことかは」とせめてためらひ、しほりあげて、「成等正覚」など宣ひてのち、

淀むやと待ち来しものをそこはかと

見るに涙の激ぎまさりけり

この下にもあはれとは見給ひてむを、まづ風の声のみを聞くは、なほかかる習ひともおぼえず、言はむ方なく思す。

かかれとは契らざりしを亡き人も

昔の下にや思ひ出づらむ

巡りの草など引きのけて、甲斐甲斐しく見ゆるは、かの尼のしわざにやとあはれは尽きせず。(中納言)「いかにすべき。なほかの尼に会ひて、ありし世のことも聞かまほしきを、召し寄せむも人目しげき所便無かるべし。この帰さに身づからものせむ」と思ふを、ふとさしのぞかむもはしたなく、かれもおぼえなき心地すべきを、(中納言)「なほあきのぶ行きて案内聞こえよ」と宣ふ。かしこまりて行く。この寺の下にていと近かりけり。門など言ふべくも見えず、あはれに心細き遣り戸を仕立てて、灯火かすかに、隙々より見ゆるに、初夜(そや)の行ひするなりけり。おぼほれぬる回向の末つ方、この人さへ悲しと聞く。うち叩けば、(侍従)「誰ぞ」など言ひて開けたり。忍び給へどおのづから言ひ伝へて、この辺りにもやし給ふなど、尼君も聞きて、いとど昔を思ひ出でて、(侍従)「人々しき程ならましかば」と、数ならぬ身の憂ひさへうちまぜて泣き居たりけるに、かく思はずなる御消息にあきれまどひて、なかなか嬉しなども思はず、すすろに泣くめり。ことわりおぼえて、この人もうち泣く。(あきのぶ)「待ちおはすらむに心地無くや」と急ぎたち帰り、率て奉る。

語釈

○いよいよ御心地もさはやぎ果て給へば 「一四」でも、母の病気がかなり良くなる、の意で、「心地はこよなくさはやかにこそおぼゆれ」というような例がある。その「さはやか」を動詞化したのが、「さはやく」。以下の段落でも「さはやく」は、もっぱら、母君の病気の回復について用いられる。

○さぶらふ人々は、まして千代をも経ぬべく、若き人はすすろに帰りま憂く

「春の歌とてよめる いつまでか野辺のべに心のあくがれむ花し散らずは千代ちよもへぬべし」(『古今和歌集』・卷二(春歌下)・九六)《今井氏》

○村雨のほろほるとかかりければ、「なには隠れぬ」と貫之がかこちけむ古事、思し出でられて、「なには隠れぬ」は、「難波へまかりける時、

田蓑たみのの島にて雨にあひて詠める つらゆき 雨により田蓑の島を今日けふゆけど名には隠れぬものにぞありける」(『古今和歌集』・卷一七(雑

歌上)・九一八)《今井氏が指摘する。但し、今井氏の場合、第三句は「けふゆけば」。私が引用した新全集『古今和歌集』の底本は、高

松宮家旧蔵本》

○例の、古事まづ思し出でて、「蒼苔路滑らかにして、僧、寺に帰る」とうち誦じて 「蒼苔路滑らかにして僧寺てうに帰る 紅葉声乾かほいて

鹿林しかのりに在り 温庭筠えんていぎん」(『和漢朗詠集』・秋・鹿)。《今井氏》

○待たれる鐘のつくづくとながめ居給ふに、 「西行法師 待たれつる入相いりあひの鐘かねの音ねすなり明日あすもやあらば聞かんとすらん」(『新古今

和歌集』・卷十八(雑歌下)・一八〇八)《今井氏》

○「花色衣身を去らねば」 八重律の姫君が詠んで山吹色(＝黄色)の着物に書きつけた「恋しとも言はれざりけり山吹の 花色衣身

をし去らねば」のこと(二一九)。《今井氏》

○思ひ懸けぬ千歳の形見に 予想外であることを意味する「思ひ懸く」プラス打ち消し表現は、『源氏物語』の校注書、例えば新全集などでは、「懸」が清音である場合と濁音である場合とがある。今井氏の『八重律』の釈文でも、やはり、一五七頁三行目では、「……そのかみゆめおもひかけざりし……」のように清音にしているが、一五二頁四行目、即ち、この箇所では、「……思ひがけぬちとせのかたみ

に……」と濁音にしている。しばらく、清音で統一して置きたい。

○あきのぶを召して、(中納言)「……この寺を建てそめつらむ昔語りも、尋ねまほしきに、率て参れ」と宣ふ。この寺の歴史を訊き、そのついでにさりげなく、山吹色の幡について探ろう、というのが、中納言の魂胆である。

○古きこと尋ね給ふべき様もしたらねば、ただゆかしきことの筋のみ問ひ給ふ。前項のような魂胆は、うまく行きそうもない。やつてきたのが、「あるじの僧」ではなく、いかにも無知な顔つきをした、「あやしき法師」だったからである。そこで、単刀直入に訊くことにした。

○筑紫へ下り給ふ大弐とやらむ、御女の、とみに隠れ給ふとて、大弐は、八重葎の姫君を、恰も、実の娘であるかのように手厚く葬った、ということであろう。

○若き女のいいたう悲しみ給ひしが 底本は「……給へしか」(六一丁表7行目)だが、今井氏の推定に従って校訂した。

○法師の教へし方をそこはかと尋ねいますに、今井氏は、「そこはかと」を掲出し、「ここでは「此処かしこと」の意であろう」と注するが、それに加えて、「そこ墓と」も掛けられているだろう。

○淀むやと待ち来しものを…… 悲しみが紛れ、涙を抑えることができるかと思つてきてみたのに、確かにそこが墓だと自分の目で見た今、彼女の死が紛れもない事実であることを改めて思い知らされて、より一層涙が激しくなつてしまったことだ。「淀む」と「激(く)」は、どちらも川の縁語。

○この下にもあはれとは見給ひてむを、今井氏は、「この下」を掲出し、「このけの下」の誤読であろう」と注している。後統の詠歌の第四句からも支持すべき推定であるが、原本のままでも、ほぼ同じ意味で解釈することができるので、改定をしないままにして置いた。

○「いかにすべき。……この帰さに身づからものせむ」と思ふを、ふとさしのぞかむもはしたなく、かれもおぼえなき心地すべきを、(中納言)「なほあきのぶ行きて案内聞こえよ」と宣ふ。今井氏は、「いかにすべき」の前に鍵括弧、「案内聞こえよ」の後に鍵括弧閉じを施している。これに抛れば、「いかにすべき」までが会話文である。それに対して私は、「身づからものせむ」までが心内文、その後の「……はしたなく、かれもおぼえなき心地すべきを、」は中納言の心理を描写した地の文として、「なほ」から後だけを会話文と見なす。

『鎌倉時代物語集成』もこのような鍵括弧の付け方である。

〔二七〕 中納言、侍従と再会

仏の御前に入れ奉りて、尼君、かしこまり聞こゆ。かかる所とも見えず、いとものむつかしう身をだに安う振舞ふべくも見えぬを、あはれにいかにして暮らすものにかと御覽す。言ひ出づべき言の葉もおぼえ給はず、いといたう泣き給ふ。主^{あるじ}はた、まして堰き上ぐる心地して、(侍従)「かたじけなく」ともえ言ひ出でず。ややためらひ給ひて、(中納言)「さてもかかる方にて対面すべきとは、そのかみゆめ思ひ懸けざりしを、これこそ定めなき世のさかにはありけれ。かく深き契りの、見し世にははかなくも別れぬるかな。今は聞きても甲斐なく、聞かむにつけては、忍ぶの草も摘みわびぬべけれど、なほありけむ有様のゆかしきを、詳しく聞こえ給へ」と宣ふ。(侍従)「聞こえさせ給ふやうに、聞こえさせむにつけても、いみじき御心まどひは、亡き御ためにも、かへりて罪深かるべき心地し給ふれど、又おぼつかなく忍び過ぐし侍らむもいと益なし。かのありし葎の宿の主は、昔人の御叔母に侍り。年頃、一人住みにて過ぐし給ひしを、如月の頃、中務宮の御乳母の夫^{をこ}、大式に成りて筑紫へ下るに誘はれ給ひて、出で立ち給ひし。こちらの年月、離れずならひ給ひしかば、はるばるものし給はむをいといみじう思したりき。その日に成りて、叔母君、おはして、『しばし御覽^みじ送れ。かかるついでに物語でもせさせ奉らむ。かばかりにてはあへなし』など聞こえ動かして、強ひてそそのかして、率て奉り給ひし。かりそめのことと思ふ給へしかば、物などしたたむまでも侍らず。尼なども御供にまかでさぶらひしを、そのまま船に移し奉り給ふを、あさましく、かくたゆめ給ひける程、又、御前の聞こし召さむこと、あはれなりし御志など思し続けて、いといたう泣き沈みおはせしに、かしこにおはし着きては、大式のこのかみの民部の大輔^{だゆう}に逢はせ奉らむなど、ほのぼの聞こえ侍りしを、聞きつけ給ひて、いとど涙の色深く見え給ひしが、ひたすら亡き道にと思し成りけるにや、五^{いつか}、六日^{むいか}過ぐるまで、つゆばかりのものも御覽じ入れざりしが、つひにかう成らせ給へる」と泣く泣くその程のこと、いぶかしかりし口ずさみの本、「かかりと告げよ」と言^い伝^つて、「あはと消ゆとも」と泣き焦がれ給ひし、その夜のこともいとよくおぼえて語り聞こゆ。疑はしき方のまじりし時だに、飽かぬ別れの一筋はいみじう思したりしを、多くは我が情けに消えける命の程と聞こし召す心地、うつつともおぼえ給はねど、御袖の雫はよよと落ちけり。(中納言)「言ひもて行けば、ただ身づからの誤りになんありける。とく迎へましかば、かくいみじき別れはありなむや。月頃経るまで、御名^な告りだに聞かざりし心ぬるさのあまりぞかし。さてもいかなる人にか、今だにゆかしきを」と宣ふ。(侍従)

「いと便無く、かつは御心劣りもせさせ給はむ」と慎ましようこそ。今聞こえさせし御叔母のこのかみは、侍従の君とて、右の大臣おとどの上の御方にさぶらひ給ひしを、右大臣殿まだ中将にもし給ひし時、御覽じ過ぎさずや侍りけむ、この君、生まれ給ふ。平らかにものはものし給ひながら、月頃のもの思ひにや、はかなく消え給ひしかば、かの御代はりに、叔母君なん生おふしたて給ひし」と聞こゆ。(中納言)「さるべき方にて見むも口惜しかるまじきを」といどあはれに思さる。面持ちなどのかの大殿に似たりしはやと、今さら思し合はせらる。かの仲立ちのつぎつきしく言ひたりし空言も語り給ふ。(中納言)「昔より深き本意ある身にて、なべての人の持つなるほだしなどもあながちにかけ離れて、ひたみちに思ひ成らるれど、一人ものし給ふ上の思し嘆かむ心憂さに今日までかくて長らへぬるを、かかる別れはかへりて嬉しかるべき道のしるべなれど、なほさは思ひ成られず」とて又、いみじう濡らし添へ給ふ。(中納言)「よし、今は他事ことごとは言ひても甲斐無し。蓮はちすの露を玉と磨かむのみこそ、亡き人のためなるべけれ。さらに改めて、さるべき法事をと思ふ。主僧あるじの歸らむ程にさ聞こえ給へ」。(侍従)「いとありがたく亡き人の御ためは、面立たしかるべけれど、又、軽々かろしく聞こえなす人も侍らむは、御ため、いとほしう」と聞こゆ。かかる際の人は身の口惜しさもたどらぬものなるに、いと思ひやり深き心の程を、目安くあはれに見給ふ。(中納言)「京などへもものし給へ。聞きても聞きても飽かず残り多かる夢物語も、常に聞こえまほしう」となつかしう聞こえ給ふ。

(中納言)

今さらに海人の袴繩たなは繰り返し

あはと消えにし人を恋ふらむ

とて、尽きせずおし拭ぬぐひ給へる御容貌かたちの、見し折よりもをかしようあはれに、なまめかしきを見奉るままに、しづのをだまきならぬ世の中ぞ、返す返すもうらめしう、身も浮きぬべき心地ぞする。

(侍従)

「かばかりに袖や絞りし朝夕に

濡るるは海人のならひなれども

かたはらいたう」と聞こゆる様も、いと耐へ難げなり。尽きせぬ御物語に、明け方近う成りぬ。霧たちこめて分け給ふべき方も見えぬ空の

気色も、来し方の晝思し出づるに、変はることのみ多く成りにしをなほ本の身にて、我のみつれなきは口惜しうあはれに思さるべし。かの法師の料、又尼のためなど思しやりて、黄金多く遣はし給ふ。(中納言)「昨夜は御津の寺に詣でて、こよなう更かし侍りしかば、御宿直にもものし給へず」など、聞こえ給ふ。

語釈

○罪深かるべき心地し給ふれど 「心地し給ふれど」の「給ふれ」は、下二段活用の補助動詞「給ふ」の連用形。この動詞は、『源氏物語』の場合、ほとんどの用例が「思ふ」に続くが、他に「見る」「聞く」に続く例も散見する。「心地す」を受ける用例は見出せないが、「心地す」も「思ふ」の類義語なので、ひとまず、作者の誤用や書写者の誤写ではないものとしておく。

○かしこにおはし着きては、大弐のこのかみの民部の大輔に逢はせ奉らむなど、ほのぼの聞こえ侍りしを、聞きつけ給ひて、いとど涙の色深く見え給ひしが、ひたすら亡き道にと思し成りけるにや、侍従が長々と中納言に報告した詞の中の一部。この前後は、全て、正確であるが、「八重葎の姫君が、民部の大夫とあちら(九州の大宰府)で結婚させられるという噂を聞いただけで食を断つて死ぬことを決意なさった」というこの部分の話し振りだけは、多少の脚色があると言わざるを得ない。死の決意の直接の原因は、船の中で、その民部の大輔に迫られた、という事実なのに、その点を隠しているからである。より一層、故人を清らかなイメージにしたい、という報告者(侍従)が思ったからであろう。

「大弐のこのかみ」とは、大弐の子供たちの中で年上の者、の意。

○(中納言)「……主僧の歸らむ程にさ聞こえ給へ」。(侍従)「いとありがたく亡き人の御ためは、面立たしかるべけれど、又、軽々しく聞こえなす人も侍らむは、御ため、いとほしう」と聞こゆ。今井氏は、さ聞こえ給へ、でいったん、鍵括弧を閉じ、いとありがたく以下を侍従の詞だと見なしている。従いたい。ただ、「きこえ給へいと有がたく」を掲出して、「給へ」と「いと」の間に小脱文があるうと注するのは、必ずしも従えない。このように話者が突然変わるの、古典文学にはよくある。そして、「侍(る)」という丁寧語が使われているので、その丁寧語が含まれる部分は、下位の者(侍従)の発言だと、当時の読者にはわかったはずだからである。

○今さらに海人の栲縄…… 「……生田の杜の いくたびか 海人のたく縄 繰り返し 心に添はぬ 身を恨むらん」(『千載和歌集』・巻

十八（雑歌下）・長歌（《今井氏》）

○しづのをだまきならぬ世の中 「むかし、ものいひける女に、年ごろありて、いにしへのしづのをだまき繰り返しむかしを今になすよしもがな」といへりけれど、なにも思はずやありけむ」（集成『伊勢物語』第三十二段）《今井氏》。世の中は「しづのをだまきならぬ」のだが、「しづのをだまき」の如く、繰返し引きもどして昔を今にしたい、と言う気持ち。

○御宿直にもものし給へず 『源氏物語』のおびただしい数の用例に照らし合わせると、下二段活用の補助動詞「給ふ」は、ほとんどが「思ふ」の接続、それ以外の用例でも、「思ふ」と同様の意味になる動詞に接続する。この「ものす」は、やや意味が違うようなので、ひとまず、破格と判断して置きたい。

二一八 中納言、帰京

今日ぞ京へ帰り給ふ。御迎への人々、あまた引き続け参り給ひて、名残なくおこたり給ふを喜びあへり。中納言殿は、まづ内裏に参り給ひて、田舎のことも奏し給へば、湯のかしこさををかしがらせ給ふ。

さわがしき程過ぐして、上は御持仏の飾りを急ぎ思したるに、君ももとよりこの方には進み給へる御心にて、もろともに扱ひ、道々のものの上手ども召し寄せて、こまかなる心しらひ沿ゆべく宣せ付く。法服やうのもの、何くれとうちうちにもものし給ふに、うち紛れ給ふやうなれどあるを見るだに恋しき秋の悲しさはなべてだにあるを、まして御覽しそめしこの頃も、ただ今の心地し給へば、床も涙の露繁くて、寝覚めがちなり。

（中納言）

常よりも思ひぞ出づる暁は

鳴の羽搔きかき集めつつ

かくながめ明かし給ふ。あしたの空に薄霧たち迷ひて、まがきの菊もおぼつかなく、もみぢの色もほのかにをかしきを端の方につい居て、笛を少し吹き鳴らし給ふに、我ながらあはれに心細ければ、

笛竹のこの憂き節よ世の中を

背く山路のしるべとも成れ

と一人ごち給ふ。さるは、月日に添へ、いとど聖に成りまさり給ふ。かの御津の尼をも絶えずとぶらひ給ふに、あはれにかたじけなく、(侍従)「かからざらましかば」と、捨てける程を嬉しう思ひけるとか。

(二八 中納言、帰京)

○こまかなる心しらひ沿ゆべく宣せ付く 「沿ふ」という八行四段活用の動詞が、ヤ行に変化している。「二八」段落で、「教ふ」という

八行下二段活用動詞がヤ行活用に變化していたのと同じ。

○あるを見るだに恋しき秋の悲しさは 「時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを」(『古今和歌集』・卷十六(哀傷)・八三九)《今井氏》

○寢覚めがちなり。 秋は寢覚めがち。

【用例その一】人やりならぬ独り寝したまふ夜な夜なは、はかなき風の音にも目のみ覚めつつ(「宿木」(七))。八月。

【用例その二】例の、寝ざめがちなるつれづれなれば、(「宿木」(一九))。八月く九月。恐らくは、八月。

【用例その三】寝ざめがちにつれづれなるを(「蜻蛉」(一九))。女郎花の季節。

○常よりも思ひぞ出づる…… 「睨の鳴の羽がき百羽がき君が来ぬ夜は我ぞかずかく」(『古今和歌集』・卷十五(恋)五七六二)。この引き歌については、今井氏も指摘する。

もう一つ参考になるのは、同仮名序で「……睨の鳴の羽掻きを数へ、あるは、呉竹の憂き節を人にいひ、……」のような記述がある(二四頁4〜5行目)点で、本作品でも次の詠歌では、「(笛)竹の憂き節」が歌題と成っている。

○かの御津の尼をも絶えずとぶらひ給ふ 上落して、自分のもとに仕えよ、という中納言の誘いを結局は断り、そのまま、八重律の姫君が眠る御津に残った、ということが、この一文からわかる。その御津まで、中納言のほうから尋ねて行くことがひっきりなしであった。

追記

私は、『八重葎』注釈(中)「脱稿の際もこの『八重葎』注釈(下)「脱稿の際も、国会図書館の雑誌記事索引等で研究論文などを検索しているが、今回、『学苑・日本文学紀要』第八一九号所収の大倉比呂志氏『八重葎』論」がヒットした。第八一九号は、二〇〇九年一月発行であり、『八重葎』注釈(中)「締め切り時には未刊だったはずである。卓見が多く含まれて居り、大いに啓発された。

まず、『三、紅葉見物の意味』では、私の段落分けで言う「三」の中に、その後の「中納言が恋心を催して築地の崩れより進入した」場面の伏線がある、「紅葉見物の詳細な記事が中納言の闖入事件とその後における姫君との恋に脈絡している」との御説には、基本的に賛意を表したい。又、私の段落分けでは「一九」段落の最後に位置する、「恋しともいはれざりけり山吹の花色衣身をしさらねば」という八重葎の姫君の詠歌を、「目の前にいない中納言に向かって、恋しいと口に出してはつきり言うことができないのは悲しい。でも、この山吹の花色衣を私は身体離さずに着ているので、いつも中納言が私のそばにいるような気がして、心が安まる」と解釈していて、「でも」より下が大倉氏の新見となっている。私は、『八重葎』注釈(中)「でも、「一九」段落の語釈で辛島正雄氏のお名前を挙げたが、今改めて考えてみても、やはり、第三句以下は「ダツテ、山吹ノ花色衣ハ「クチナシ(梔子色)」デ、ソレヲ身ニツケテイルワタシモ「クチナシ(口無シ)」ナノダモノ」(『中世王朝物語史論』下巻九五頁)が第一義的な意味だと思ふ。しかしながら、大倉氏が説かれたような気持ちも言い表したかった、という可能性は大いにあるだろう。

さて、従来、擬古物語『八重葎』の先蹤として、『狭衣物語』、『源氏物語』の中の末摘花物語、夕顔物語などが指摘され、大倉氏もこれらを追認すると共に、玉鬘、紫上と『八重葎』女主人公、薫と『八重葎』男主人公との関係にも言及している。こうした考察は、前述の通り、卓見を多く含むものではあるが、しかし、『八重葎』にとって最も重要な先蹤は、宇治大君の死の前後である。この持説は、注釈が終わった今の時点でも、変更する気になれない。

以上、最新の雑誌論文について、私見を述べた。

本については、やはり、全訳は未刊のようである。

『中世王朝物語全集』各巻発行予定については、特に最近ではインターネットにより随時、情報収集に努めて来た。同叢書の『八重葎』

を拝読し、おおむね異見がないようなら、全文掲出のような形で私見の公表は中止するつもりであったが、二〇〇九年四月に入つて笠間書院のホームページ、若しくは、「ブログ」（二〇〇九年三月十二日更新）を開いてみてまあ、『中世王朝物語全集』のうち二〇〇九年三月までに刊行されたもの及び二〇〇九年四月下旬刊行予定のもの、合わせて十二冊が広告されている中に『八重葎』は入っていない。『中世王朝物語全集 八重葎』を拝読しないまま、本注釈を提出することにする。とくに公刊されている古典文庫本の解説、注釈もすばらしいものではあるが、『八重葎』序盤、中盤、終盤に亙つて少なからず異見があり、それぞれを『八重葎』注釈（上）、同（中）、同（下）の最初のページに注番号明記という方法でお示しし、広く大方諸賢に問うている次第である。加えて、今井氏の単純ミスかとおぼしき箇所を含めて、釈文も訂正した。その一方で、私の釈文にも単純ミスが続出するようなら、全文掲出の意義が半減するので、釈文の部分について校正を繰り返したのであるが、生来の粗忽ゆえ、誤植が無いと断言する自信はなく、広くご教示を求めると共に、御海容を乞うところである。

〔平成二十二年四月一〇日提出〕